

野菜 ミニトマト「アイコ」JA新おたる導入事例

「フルーツの町」からミニトマトの大産地へ 在圃性、収量性のよい「アイコ」が 果樹との複合経営に貢献



北海道

JA新おたる 概要(2024年度)

- ◆出荷時期:7~10月
- ◆主な出荷先:本州、九州

仁木町トマト生産組合

- ◆部会員:66名(アイコの生産者は16名)
- ◆栽培面積:2.4ha(アイコ)
- ◆出荷量:138t(見込み)

仁木町アイコ生産組合

- ◆部会員:26名
- ◆栽培面積:12ha
- ◆出荷量:660t(見込み)



JA新おたる 販売部事業振興課 課長の中谷俊介さん(左)と横川翔平さん(右)

産地概要

JA新おたるは、北海道の南西部に位置し、仁木町、小樽市、赤井川村、積丹町の四市町村を管轄する広域のJAです。北海道の中では比較的温暖な気候を活かし、果樹をはじめ、野菜、花き、水稻、酪農畜産など、多岐にわたる農業が営まれています。

中でも、古くから果樹の特産地として栄えてきた仁木町は、サクランボとブドウ(生食用)、ブルーンの作付面積、生産量が全道一。また、同じく全道一の生産量を誇

るのが、ミニトマトです。夏秋トマトでは、全国的にもトップブランドの産地として名高く、今では同JAを支える主力品目となっています。そんな仁木町では、現在、二つの生産組合が、ミニトマト「アイコ」を栽培しています。その一つが、50年以上も前からトマト作りに取り組み、町をミニトマトの大産地へと導いた、JA新おたる仁木町トマト生産組合(以下、トマト組合)です。

まず初めに、副組合長の妹尾隆さんに、トマト組合の成り立ちや「アイコ」導入の経緯、評価をお聞

きました。

JA新おたる仁木町トマト生産組合 導入の経緯

トマトで日本一を目指す

もともと仁木町でトマトを栽培するようになったのは、1954年の洞爺丸台風被害によるリンゴ産業の衰退が大きなきっかけだそうです。その後、1960年代に米の減反政策が加速する中、地元の農業青年たちが新たな活路を見いだすべく調査研究し、「これなら日本一の産地を目指せる」と、選択した品目がトマトでした。



1 生産者によって集出荷貯蔵施設に運び込まれたミニトマト「アイコ」。



2 ミニトマトの集出荷ライン。1日の処理能力は47t（約1万5千ケース）。



3 自動で箱詰めされた後は製品庫で一時的保管。庫内は常に15度以下に設定。

わずか7名で組合を立ち上げ、大玉トマトの栽培を始めたのが1973年のこと。全道で初めて道外への出荷を実現し、1980年代に入りミニトマトの栽培を始めると、次々とブランド化を進め、その後、主力を大玉トマトからミニトマトに移しました。

組合員全員が、統一した有機質系の肥料や堆肥を使うなど、徹底した施肥管理などにより栽培した高品質のミニトマトは評判を呼び、出荷先は、首都圏から中京、阪神へと南下し、トマトの大産地、九州への進出も果たしました。

JA新おたる仁木町トマト生産組合「アイコ」の評価

「アイコ」は頼りになる品種

現在、同組合が指定品種として栽培しているのは、ミニトマト4品種と中玉トマトの1品種。ミニトマトは、「もてもてネ7」「もてもてネスター」のように、「もてもて」と名づけてブランド化していますが、2014年、このシリーズに新たに仲間入りしたのが「もてもてアイコ」です。

消費者の多様なニーズに応えようと、試験栽培を経て「アイコ」をブランド化するに至ったのは、食味や食感、ユニークな形、認知度の高さ、そして何より在圃性に優れていることが大きな決め手になりました。

サクランボとミニトマトの複合経営に取り組む妹尾さんは、3品

種のミニトマトを栽培していて、「アイコ」を「とても頼りになる品種」と、評価されています。

「その年の気候などの影響で、品種によってうまくいったりいかなかったりするので、保険をかける意味で複数の品種を栽培していますが、その中で、『アイコ』は収量的に安定している品種だと感じています。特に昨年は、酷暑のせいでのミニトマトは大幅に収量を落としたのですが、『アイコ』は着花、結実がよく、収量が安定していました」。

また、毎年7月はサクランボとミニトマトの収穫が重なり、多忙で手が回らないそうですが、在圃性に優れた「アイコ」は、多少、収穫が遅れても軟化しにくく、収穫後も日持ちがするので、真夏でも

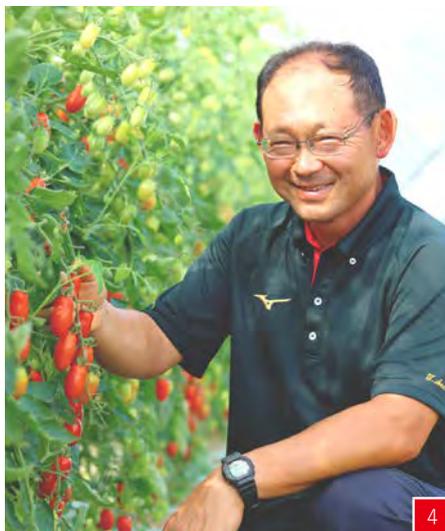
安心して遠方へ出荷できるとのこと。「ヘタが落ちやすいといった声もありますが、それ以上に、自分にとってメリットが大きいので作り続けているんです」。妹尾さんは、「アイコ」を選択している理由を、このように説明してくださいました。

JA新おたる仁木町アイコ生産組合導入の経緯

台風を機に「アイコ」の栽培を

2009年に、町内で新たに設立されたのが、「アイコ」を専門に生産、出荷する「JA新おたる仁木町アイコ生産組合」（以下、「アイコ組合」）です。

組合長の浅田光好あさだみつよしさんによれば、設立の5年前、北海道に大きな被害をもたらした台風18号を機



4 JA新おたる仁木町トマト生産組合副組合長 妹尾隆さん



5 「もてもてアイコ」をはじめ、ユニークなブランド名が特徴

に、果樹を栽培する一部の生産者が、これまでのミニトマトとは見た目や食感が違う、その当時、発表されたばかりの「アイコ」を作り始めたといいます。

サクランボ、ブドウ、リンゴを栽培する浅田さんもその一人。ご近所の農家から「アイコ」の苗をもらい、試しに露地で栽培したのをきっかけに、翌年、果樹から一部転換。ハウスでのミニトマトの生産に乗り出しました。

「ミニトマトは果樹と違い、1回収穫したら終わりではなく、自分の手入れ次第で長く収穫できる場所がおもしろいなって思ったんです。うまく管理すれば安定した量がとれるので、自分の経営の中で計算ができる。果樹の単価が芳しくない中、そこが一番の魅力でした」。

収穫した「アイコ」は、当初、各道内の市場に個選で出荷していました。しかし、道内販売がほとんどだったため、一致団結して本州への出荷を目指そうと、2009年に11名の有志で組合を立ち上げました。

その翌年には、「愛してアイコ」という名前を付けてブランド化。市場で目を引くように、緑色のオリジナル段ボールを作り、本州への出荷を開始しました。

JA新おたる仁木町アイコ生産組合「アイコ」の評価

群を抜いておいしい！

今では「アイコ」が経営の柱に

その後、組合員は26名となり、出荷額も順調に伸びていきました。現在、浅田さんが「アイコ」を栽培しているハウス面積は約50a。組合員の平均面積も同じくらいで、全体で約12haになります。

なお、「愛してアイコ」の出荷基準は基本的に糖度8度以上を目標にしています。施肥管理は、土づくりに脱脂米ぬかを使用し、各自が土壌にあった資材を選択して、管理しています。

組合員全員が同レベルの高品質

の「アイコ」を生産できるよう、定期的に勉強会を開いたり、個々で指導を受けたりと、切磋琢磨しながら腕を磨いています。昨年は、酷暑に悩まされたそうですが、今年は順調で「この分だと収量が2〜3割は増えるんじゃないかな」と、浅田さんはうれしそうに語ります。

「9月に入って寒暖差が出てくると、どんどん糖度が増してきます。果肉がしっかりしていて、ほんのりとした酸味もあって……私は『アイコ』1本なので他のミニトマトと比較はできませんが、本当においしい時期の『アイコ』を食べたら、きっと他のミニトマトじゃ物足りなくなってしまうんじゃないかな。おかげさまで、今や『アイコ』は、うちの経営の柱になっています」と、浅田さん。農業歴は45年になるそうですが、「これからも、まだまだ『アイコ』を栽培していきますよ」と、終始穏やかに、そして頼もしくお話ししてくださいました。

今後の課題

産地を守るために
JAとしてできることを

2018年には、JA新おたるミニトマト集出荷貯蔵施設が完成し、稼働を開始しました。国や町の事業を活用して整備したこの施設は、

国内でも類を見ない、内部・外部センサーを備えた最新鋭の選果機を導入しました。これにより、色や形、大きさのみならず、糖度やリコピンの含有量まで測定できるようになり、品質の均一化、省力化につながりました。

「それまで生産者が手作業で行っていたことが全て自動化されたことで、選果作業に割いていた時間を収穫や管理作業に回せるようになりました。ただし、今なお、高齢化や労働力不足は地域の大きな課題です。産地を守るため、作付面積を維持するために、JAとして、町の新規就農者支援事業に協力したり、果樹との複合経営の希望者をフォローしたり、生産者が安心して農業に取り組めるように努めていきたい」。JA新おたる販売部事業振興課の課長・中谷俊介さんはこのように力強く語ります。

これまで多くの苦難を乗り越えてきた、50年の歴史を持つ大産地だからこそその創意工夫と団結力で、今後もさらに発展していくことを願っています。

文/おおいまちこ 写真/高木あつ子

販売ページ…………… P.40



6 JA新おたる仁木町アイコ生産組合の浅田さんご夫妻



7 市場で目立つように珍しい緑色の段ボールを採用。組合員の名刺も同じ緑色に